

2025 年 8 月 25 日

株式会社秋葉牧場ホールディングス

インド共和国/日本式酪農と DX 化による搾乳生産性及び乳製品品質向上可能性実証（調査）が、経済産業省の令和 6 年度補正グローバルサウス未来志向型共創等事業費補助金（小規模実証・FS 事業）に採択

創業138年の酪農ノウハウを伝えたい 世界最大の乳製品大国へ

株式会社秋葉牧場ホールディングス(本社:千葉県八千代市、取締役社長:秋葉秀威)は、2025年8月1日、インド共和国/日本式酪農と DX 化による搾乳生産性及び乳製品品質向上可能性実証(調査)事業が、経済産業省の令和6年度補正グローバルサウス未来志向型共創等事業費補助金(小規模実証・FS事業)に採択されたことをお知らせします。この度、採択された事業は、インド共和国における、日本式酪農技術とセンサーやカメラ等を使ったDX化による、搾乳量の向上・生乳の高品質化・遠隔管理・高度な酪農 IT 技術者の育成を目的としています。

＊令和6年度補正グローバルサウス未来志向型共創等事業費補助金
(小規模実証・FS 事業)特設 HP<https://gs-hojo-web-fspoc.jp/index.html>

● 補助金申請までの経緯

株式会社秋葉牧場ホールディングスは、千葉県成田市にて観光牧場「成田ゆめ牧場」を運営し、年間約 30 万人のお客さまをお迎えする一方で、明治 20 年に創業した酪農業においても、さらに規模を拡張しつつあります。少子高齢化と人口減少が確実な明日の日本。既存販路のみでは先細り不可避という状況を見据え、弊社では海外進出の第一歩として、2022 年にはシンガポールにおいてソフトクリーム等の試験販売を実施し、以降、ソフトクリームミックスの輸出を行って参りました。

● なぜ「インド」なのか？

国連食糧農業機関（FAO）による本年 6 月の「食料アウトルック」報告書によると「バングラデシュ・インド・パキスタンを中心とするアジアでの乳牛頭数の増加と生産性の向上が、世界の生乳生産量の増加を牽引する」とされています。中でもインドは、世界最多人口国であるだけでなく、世界最大の乳製品生産量国でもあります。半面、その生産性の低さや貧困などが課題とされています。

弊社ではそうした情勢を踏まえ、海外進出の第二歩として、2023 年からインドへの進出を検討、現地における視察や意見交換に着手いたしました。その過程にて、文化・社会・経済等の諸相につき深い構造理解の必要性を痛感し、さらに多層的な調査を行うべく補助金を申請、この度、その将来的構想が経済産業省に認められ、補助金採択に至りました。これにより「構想通りに日本型酪農が適合するのか」「乳製品の安全な流通ルートは確保できるのか」等につき、現地における、より本格的な調査が可能になります。調査結果と課題の抽出を経て、パートナー企業の選定や農場・製造工場の候補地検討へと進める計画であります。

● インド進出構想の特異点

弊社の「インド進出」構想における最大の特徴は、「モノ」ではなく「ノウハウ」の輸出であること。乳製品の輸出や販売ではなく、日本型の酪農・製造技術を現地酪農に融合させ、現地スタッフと協業することで生産性の向上を図る、言わば「伴走型」「協創型」の構想です。インドの酪農はその多くを小規模な酪農家が担っており、搾乳量や製造にも多くの課題があるとされます。逆に言えば、世界最大の需要があるだけに、飼養管理や飼料改善等による飛躍的発展の可能性が大きいと言えます。日本近代酪農の黎明期から培ってきたノウハウを現地スタッフと共有することで、現地の搾乳量向上・生乳の高品質化・遠隔リモート管理・高度な酪農 IT 技術者の育成を目指して参ります。

● 将来展望

鮮度が重要である乳製品ですが、地政学上インドはアジア・中東への輸出拠点足りうる優位性があり、将来的には諸国の食糧問題やたんばく質不足の軽減にも寄与できるものと考えております。現時点では実証（調査）事業との枠組みですが、IT を活用した遠隔管理体制と生産性向上を始めとする、持続可能な酪農モデルの構築支援に至った場合、海外だけでなく、廃業の相次ぐ国内酪農業界にも新たなモデルを提示することが期待でき、国内外の酪農業の活性化という大望を携えての新たなトライアルとなります。「牛が神様とされる国」の酪農成長に向け、創業 138 年を迎えた日本の牧場が挑みます。

お問い合わせ・画像のメール配信・写真送付ご希望の際は下記までお願いいたします

成田ゆめ牧場 広報担当：鈴木・高橋 広報問い合わせ番号：0476-96-1001 メール：koho@yumebokujo.com

企業名：株式会社秋葉牧場ホールディングス 所在地：千葉県八千代市緑が丘 2-2-10